

NRI 学生小論文コンテスト2013

# 募集告知から審査、 そして表彰まで

## 募集告知

# “わくわく社会”を描く 小論文コンテストがスタート!

2013年のコンテストは、5月10日のNRIホームページ上での募集要項発表とともにスタートしました。

今年も多くの皆さんにコンテストに応募いただこうと、告知活動を展開しました。チラシやポスターを配布し、新聞や雑誌に広告を掲載。全国の高校や大学にも案内を送り、応募を呼びかけました。

### “わくわく社会”というテーマ

“わくわく感”は、人を大きな夢や理想に駆り立て、幾多の困難を乗り越えさせるエネルギーとなります。“わくわく感”をみんなが持ち続けられる社会、“わくわく社会”を構想し、その実現のために、自分たちがすべきことを前向きに考えてほしい、という想いを込めています。

### 世界に向けて未来を提案

世界のいたるところで、政治・経済・社会に大きな影響を与える事態が相次ぎ、将来の不透明感、閉塞感は強くなっています。日本から世界に向けて未来を提案し、行動することは、これを打破し、新たな時代を切り開いていくことにつながると考えています。

### ペア応募のねらい

2011年のコンテストから、ペア応募を受け付けています。互いに話し合うことが、考えをより深めることにつながるといった考えからです。

## 野村総合研究所主催 NRI 学生小論文コンテスト2013

世界に向けて未来を提案しよう!

募集テーマ  
あなたが考える“わくわく社会”を描いてください

野村総合研究所(NRI)は、これからの社会を担う若い世代の皆さんに、日本や世界の未来に目を向け、自分たちが何をなすべきかを真剣に考え、その熱い思いを発表する場をもていただくこと、2006年から「NRI 学生小論文コンテスト」を開催しています。全国の大学生、留学生、高校生の皆さん、日本を元気にする新斬で力強い提案をお待ちしています。

### 大学生の部

賞：[大賞1名]賞金50万円 [優秀賞若干名]賞金25万円  
[佳作若干名]賞金5万円

字数：4,500~5,000字(別途400字程度の要約を添付)  
応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4~5年)に在籍している学生で、2013年6月1日時点で27歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は、大学生の部、留学生の部、高校生の部の応募資格者に限る)。

### 留学生の部

賞：[大賞1名]賞金50万円 [優秀賞若干名]賞金25万円  
[佳作若干名]賞金5万円

字数：4,500~5,000字(別途400字程度の要約を添付)  
応募資格：日本語の大学院、大学、短大、高等専門学校(4~5年)、日本語学校に在籍している留学生で、2013年6月1日時点で30歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る)。

### 高校生の部

賞：[大賞1名]賞金30万円 [優秀賞若干名]賞金15万円  
[佳作若干名]賞金3万円

字数：2,500~3,000字(別途200字程度の要約を添付)  
応募資格：日本国内の高校、高等専門学校(1~5年)に在籍している学生、個人またはペア(ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る)。  
※大学進学をめざして勉強している大学受験資格を持つ学生の方は、大学生の部に応募ください。

### 応募の際の注意点

●応募いただいた論文は、日本語で執筆された、自作で未発表のものに限ります。  
●コンテストホームページにある「応募用紙」をご利用ください。  
●論文の中で、他の著作物を引用する場合は、その箇所を明記するとともに、論文の最後に出所を記載してください。  
●論文は独自タイトル、要約がないものは審査対象外となります。  
●表紙の文字、および表紙のタイトル、注釈や、参考文献一覧は、字数に含まれません。  
●ご応募いただいた論文の著作権は、野村総合研究所に譲渡することをご了承ください。  
●NRIグループ社員の家族はご応募いただけません。

### 募集期間

2013/6/3(月)~9/9(月)

●オンライン送信の場合は、締め切り日当日中に事務局で受信したもまで有効  
●郵送の場合は、締め切り日までに「必着」

### 応募方法

下記の「コンテストホームページ」で募集要項を確認の上、「応募用紙」をダウンロードし、必要事項と論文(本文、要約)を記入して、以下のいずれかの方法でお送りください。  
①「コンテストホームページ」の応募フォームからオンラインで送信  
② CD-Rに保存の上、コンテスト事務局に郵送(CD-Rは返却いたしません)

### 審査方法

野村総合研究所の社長による一次審査、および、推考学理事を委員長、ジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰氏、ノンフィクションライターの最相親月氏を特別審査委員、社員数名を審査委員とする審査委員会による二次審査を実施します。



### 入賞論文の発表

11月29日(金)に、佳作を含む入賞論文を「コンテストホームページ」で発表します。  
※入賞した論文のタイトル、および入賞者の氏名・学校名・学年を公表させていただきます。

### 論文発表会

12月20日(金)の夕方に、東京(野村総合研究所丸の内総合センター)で論文発表会を開催します。  
※論文発表会への参加は必須ではありません。

### 表彰式

12月21日(土)に、大賞・優秀賞入賞者の表彰式を東京で開催します。

### コンテストホームページ

[www.nri.co.jp/contest/](http://www.nri.co.jp/contest/)

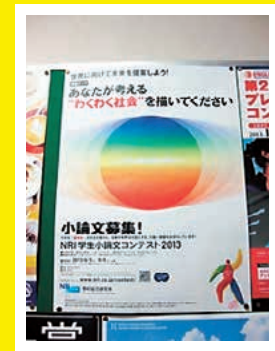
お問い合わせ：〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5丸の内北口ビル 株式会社野村総合研究所「NRI 学生小論文コンテスト2013」事務局  
TEL：03-6270-8200 E-mail：contest2013@nri.co.jp



## 全国の学校や書店で コンテストへの応募を呼びかけました

今年も、全国の大学敷地内の掲示板や書店のインフォメーションコーナーなどにポスターやチラシを設置して、コンテストをアピールしました。

また、NRIグループの社員有志が告知活動に参加。出身校にメッセージを添えてポスターやチラシを送ったり、実際に足を運んで、直接学生たちに応募を呼びかけました。(詳しくはP.100)



東北学院大学 土樋キャンパス



日本語教育学会 春季大会



中央大学生生活協同組合 多摩店



静岡大学 国際交流センター



岡山大学 工学部



九州大学 伊都キャンパス学生食堂



## 審査

# 厳正な審査を経て、入賞論文が決定

入賞論文は、予備審査、1次審査、2次審査という3つのステップを経て、決定されます。

まず、事務局で予備審査を行い、一定の基準をクリアした論文がNRIグループの社員による1次審査に進みます。今回は、1次審査で評価が高かった23点の論文が2次審査に進みました。2次審査会において、2次審査委員による議論の末、11点の入賞論文が確定しました。

どの審査段階においても、応募者の属性を秘匿し、規定の評価基準に基づく厳正な審査が行われました。また、それぞれの応募作品を複数の者が評価し、評価の偏りを抑えています。

**募集** 2013年6月3日～9月9日 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ

**予備審査** 9月10日～10月17日 事務局で応募論文が審査基準を満たしているか確認

**1次審査** 10月18日～11月5日 NRIグループの社員123人が論文を評価、23点の論文が2次審査へ

**2次審査** 11月8日～11月19日 2次審査委員10名が論文を評価

**2次審査会** 11月21日 2次審査委員が集まり、議論を経て入賞論文11点を選出

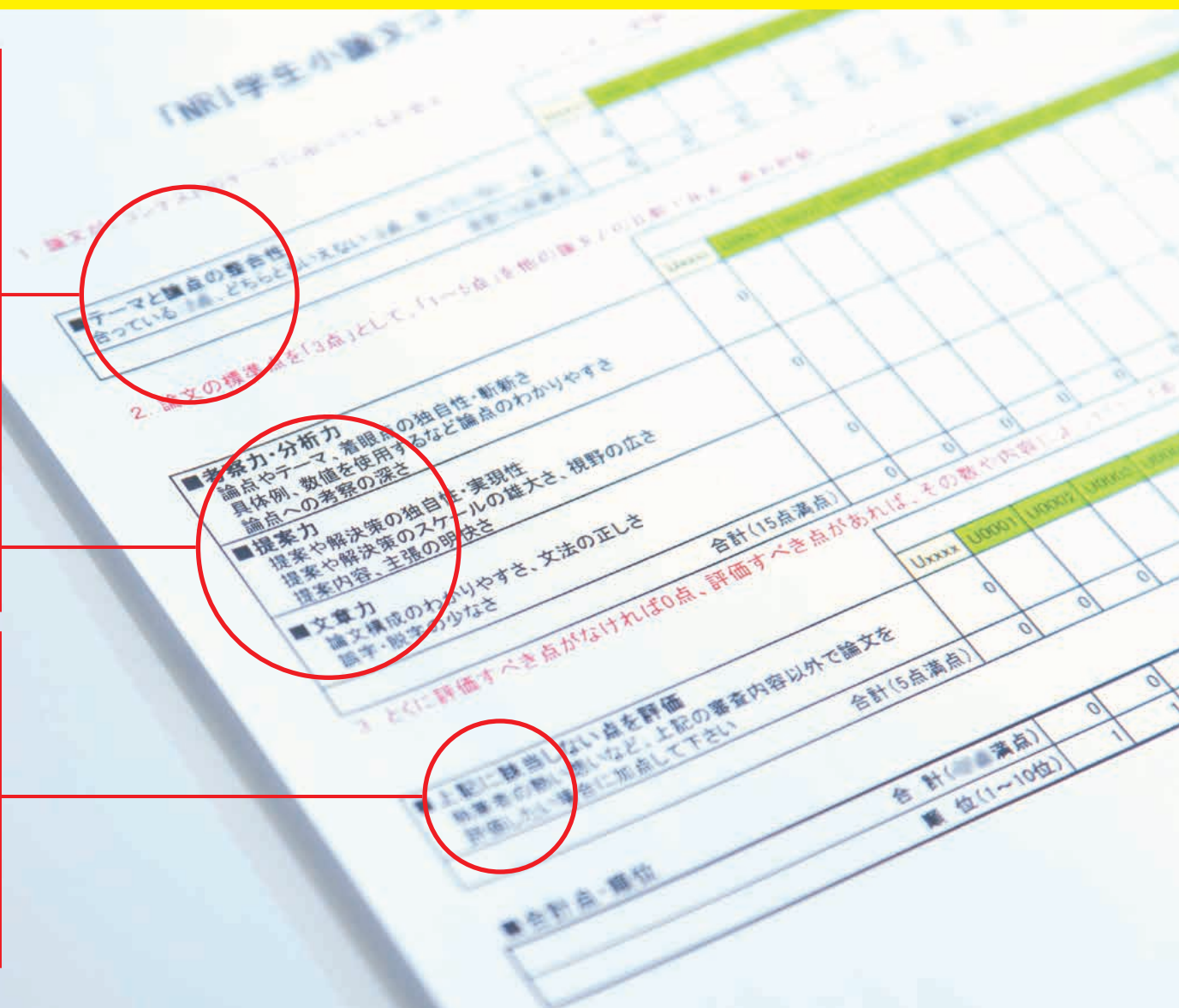
**入賞論文発表** 11月29日 NRIホームページにて発表

### 論文審査の評価基準

- **テーマと論点の整合性**
- **考察力・分析力**
  - ・論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
  - ・具体例、数値を使用するなど論点のわかりやすさ
  - ・論点への考察の深さ
- **提案力**
  - ・提案や解決策の独自性・実現性
  - ・提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
  - ・提案内容、主張の明快さ
- **文章力**
  - ・論文構成のわかりやすさ、文法の正しさ
  - ・誤字・脱字の少なさ

### 評価基準以外のプラスアルファ

- **上記に該当しない点を評価**
- 評価基準以外の尺度で高く評価する点がある論文は、この項目で加点されます。例えば、執筆者の熱い想いや、独自の調査・取材などが評価されます。



### 論文の要約も審査のポイント

このコンテストでは、応募論文に対し、大学生・留学生は400字程度、高校生は200字程度の要約を課しています。この要約も審査項目の一つ。2次審査の対象となった論文については、NRIグループの社員が論文の要約を読んで、投票を行います。

#### ● 論文要約投票の評価基準

- ・論点やテーマ、着眼点の独自性
- ・提案や解決策のスケールの雄大さ
- ・視野の広さ

\*上記の視点から、NRIグループの社員が優れていると考える1作品に投票。

#### その作品を選んだ理由:

「テーマである“わくわく社会”に最もマッチしていると思った」

「日本国内に限らない視点が良いと思った」

「短い要約で論文の内容を読みたいという気を起こさせてもらった」

「発想がユニークで、一番わくわくできた」

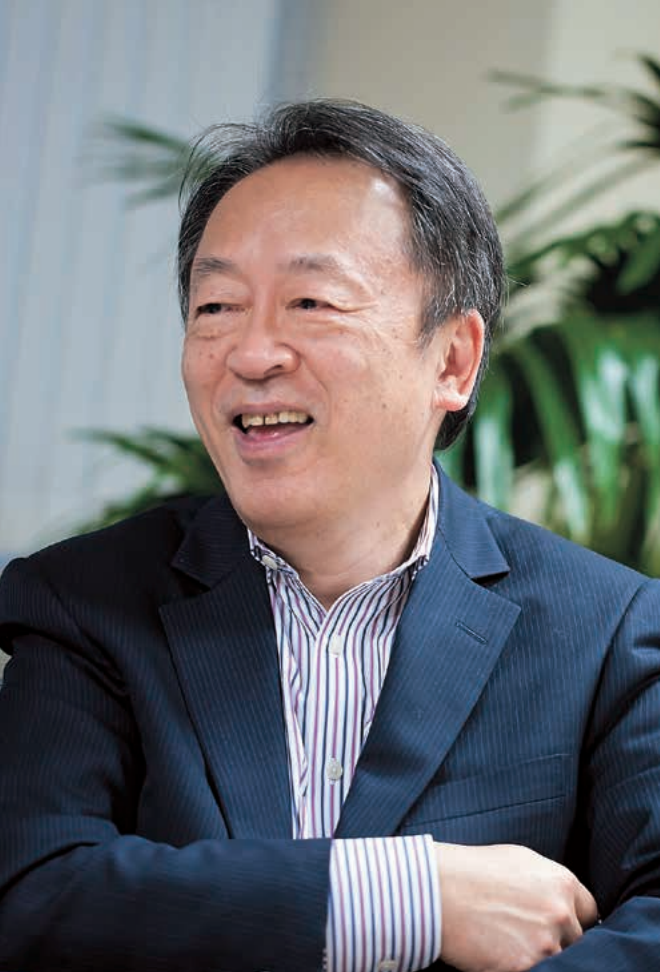
「似ている観点のものが複数あった中で、より具体性を感じた」



## 2次審査会

# 審査委員10名が議論を深め、 入賞論文を決定

審査委員10名が3時間にわたる熱心な議論の結果、  
1次審査を通過した23の論文の中から、11の入賞論文を決定しました。



審査委員長  
**椎野 孝雄** 理事

「世界に向けて自分の考える未来を提案しよう！ あなたが考える“わくわく社会”を描いてください」というテーマは、自分なりの夢と、論文としての論理的展開や具体的提案のバランスをとるのが難しかったと思います。今年の応募作品には、日本中心にもの考えるのではなく、世界中の人々と共に進んでいこうという広がりのある視点が感じられました。若い人たちのこのような考え方に触れることができ、非常に嬉しく思いました。



特別審査委員  
**池上 彰** さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

「わくわく社会」というテーマに対して、わくわくすることよりはむしろ、現在の日本や世界が抱えるさまざまな問題のマイナス点を何とか減らそうという提案が多かったと思います。「世界に向けて未来を提案しよう！」というこの「未来」には、夢が描きにくかったのかもしれませんが、「少しでもより良い未来を作りたい」という強い意志が感じられる論文も多く、非常に心強く感じました。



特別審査委員  
**最相 葉月** さん ノンフィクションライター

若い人たちが今、「わくわく社会」「未来」への想像力をどれだけ羽ばたかせることができるのか、そんな思いで審査にあたりました。大学生の部では、社会人になる時期が近いいためか、小さくまとまっている印象の作品が多く感じました。一方、高校生の部では、はつらつとした作品が多く、心強く思いました。留学生の論文には、日本の良さを認めた上で未来に向けて新しい突破口を開こうという視点が見られ、新鮮でした。







審査委員  
**三浦 智康**

執行役員  
金融ソリューション事業本部  
副本部長

「自分はわくわく社会をこう考える」と明確に定義しているか、その上で独自性のある論を展開しているかという点にこだわって評価しました。大学生の論文は、手堅くまとめられている印象が強く、わくわく感という点では物足りなく感じました。



審査委員  
**淀川 高喜**

研究理事

大学生・留学生の論文では、「わくわく社会」の実現に対して独自の問題意識や命題を設定し、それに対して具体的な提案をしている作品を高く評価しました。高校生の論文では、主張のユニークさという点に注目しました。



審査委員  
**中元 秀明**

先端ITイノベーション部

大学生の論文では、独創性のある提案をしている作品を高く評価しました。留学生の論文には、経験からくる問題意識から論を展開した、読み応えある作品が多かったと思います。高校生の論文は視点が新鮮で、毎年読むのが楽しいです。



審査委員  
**中野 ひなつ**

証券ソリューション  
事業六部長

大学生・留学生の論文では、現状分析や課題の提示だけではなく、書き手ならではの提案やまとまりの良さを評価しました。高校生の論文は、自らの経験から問題意識を持ち、独自の提案につなげている作品が多く、頼もしく思いました。



審査委員  
**山之内 亜由知**

先端ITイノベーション部

初めて2次審査会に参加しました。大学生の論文は、目の前の課題を挙げるものが多く、「未来」という観点では評価が難しかったです。世界に向けてわくわくするような提案をしているものや、自ら行動する姿勢のあるものは高く評価しました。



審査委員  
**野村 武司**

コーポレート  
コミュニケーション部長

提案の面白さ、具体性、まとまりを重視し、また、読んでわくわくするかということも意識して評価しました。手堅くしっかりした内容の論文が多かったのですが、一方でもっと夢のある提案があっても良かったかな、とも感じました。



審査委員  
**横山 喜一郎**

CSR推進室長

経験や気づきをベースにして問題意識を持ち、課題を設定しているものや、提案にグローバルな視点があるものには説得力を感じます。また、筆者の思いが強く感じられ、共感できるということも、評価にあたっての大切なポイントだと思います。





## 論文発表会

# NRI社員を前に 入賞者が提言内容をプレゼン

東京・丸の内のNRI本社において、2013年12月20日、「NRI学生小論文コンテスト2013」の論文発表会が行われました。NRI代表取締役社長の嶋本正をはじめ、審査に関わったNRI社員ら約50人を前に、11名の入賞者全員が論文にまとめた提案内容を発表しました。

論文発表会は、NRI代表取締役社長の嶋本正の挨拶でスタート。「わくわく社会」という難しいテーマを、皆さんの強い想いや発想で素晴らしい論文にまとめていただいた」と入賞論文を高く評価し、東京オリンピック招致が決まったときのプレゼンテーションを例に挙げながら、「今日のプレゼンテーションを通じて、皆さんが論文に込めた“わくわく感”を共有したい」と受賞を祝いました。

その後、大学生4名、留学生3名、高校生4名の入賞者が一人ずつ、図表などをスライドに映しながら論文の要旨を発表しました。会場に集まったNRIグループ社員らは、熱心に発表に聴き入り、論文発表会の後に入賞者一人ずつに渡すことになっているメッセージカードに思い思いの感想を書き入れていました。



NRI代表取締役社長の嶋本正（左上）と入賞者たち

発表会の後は、NRI社員や過去のコンテスト入賞者を交えて、グループディスカッションが行われました。その中で出た意見や感想の一部をご紹介します。



## プレゼンについて



**入賞者（大学生）**—「緊張で固まってしまったらどうしよう」ととても不安だったのですが、社員の皆さんが明るい雰囲気の中で聞いてくださったので、無事に終わることができてほっとしています。

**入賞者（高校生）**—今回のテーマで自分は高齢化について考えたのですが、皆さんのプレゼンを聞いていると高齢化以外にも幅広い“わくわく社会”があることがわかりました。

**NRI社員**—NRIの仕事の特性上、テクノロジーありきでものを考えてしまうところがあるので、既存の学校施設を使う発想など新鮮でした。私たちがこういう視点を忘れてはいけないと思いました。

**NRI社員**—コミュニケーションの重要性や異文化理解について触れている方が多かったですね。当社にも大切な視点だと感じました。

## わくわく社会



**入賞者（留学生）**—なぜ“わくわく社会”というテーマだったのですか？

**NRI社員**—発想のベースには「若い人は今、あまりわくわくしていないのでは？」という仮説がありました。

**入賞者（留学生）**—わくわくできないというより、“わくわく”という言葉と距離を感じるのです。私は「自分にできることは何か」ということから、“わくわく”を具体的にイメージしました。

**入賞者（留学生）**—皆さんは今、どんなことにわくわくしますか？

**NRI社員**—今、大規模なイベントを企画していて、成功するかわくわくどきどきしています。

**NRI社員**—私はラグビーが好きで、2019年に行われるラグビーワールドカップのことを考えるとわくわくしますね。

## 今後に向けて



**NRI社員**—いろいろな人が話をして触発されるということは、当社にとってとても大事なことだと思っています。今日は皆さんから多くの刺激を受けることができました。これからも熱い想いをもち続けて、頑張ってください。

**NRI社員**—留学生の皆さんには、日本に留学してくれたこと、そして論文に応募してくれたことを感謝しています。今後に期待しています。

**入賞者（留学生）**—試行錯誤しても、後悔しないよう思う存分チャレンジしていきたいです。

**入賞者（大学生）**—プレゼンで発表しましたが、論文に書いた提案を実行に移すために、会社を立ち上げました。これから頑張ります。

**入賞者（高校生）**—私はアメリカの大学に進もうと決めています。

**NRI社員**—今後も社会に関心を持ち続けて、いろいろなことに挑戦し続けてほしいです。



## 表彰式

# 入賞者の皆さん、おめでとうございます！



2013年12月21日、品川プリンスホテルで表彰式が行われました。入賞者とその家族、学校関係者を招き、ともに入賞を祝いました。

まず、NRI取締役会長の藤沼彰久が祝辞を述べた後、入賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡しました。

その後、審査委員長であるNRI理事の椎野孝雄、特別審査委員であるジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんが、お祝いの言葉とともに入賞論文一つひとつに詳しく講評を述べました。

続いて行われた祝賀会では、池上さんや最相さん、NRI社員と論文の内容について語り合ったり、記念撮影をしたり、入賞者同士で連絡先を交換し合うなど、積極的に交流する入賞者の姿が見られました。



「おめでとう!」「ありがとうございます」



審査の講評に聞き入る入賞者たち



一つひとつの論文に丁寧に講評を述べる池上さん



改善ポイントも織り交ぜつつ、講評を述べる最相さん



大学生の部 大賞 宇多 将太郎さん 早稲田大学 政治経済学部3年

今回、私の論文を評価していただき、このような場に参加する機会をいただきましたことを、大変光栄に思っています。昨日の論文発表会と本日の表彰式、この2日間を通じて、同年代の意識の高い学生や社会経験豊かなNRIの社員の方々と交流させていただきました。現在、就職活動中の私にとって、とても良い刺激となりました。今回の経験を一生の宝として大切にしながら、今後に活かして自分なりに頑張っていきたいと思っております。



留学生の部 大賞 鄭 祥教さん 大阪大学大学院 基礎工学研究科 修士課程2年

「NRI学生小論文コンテスト」に大学生の部と高校生の部に加え、留学生の部もあることは、国籍を問わず、様々な意見に耳を傾ける会社の文化を示すものだと思います。実際、そのことから勇気もらい、この度、応募することができました。留学生の私が日本社会に対して考えたことは、日本人の考えと多少違いがあったので、「うまく伝えられるのだろうか」という戸惑いもありましたが、今回の小論文を高く評価していただきまして、大変嬉しく思います。



高校生の部 大賞 木田 夕菜さん 鹿児島市立鹿兒島玉龍高等学校2年

高校の修学旅行でシンガポールとマレーシアに行ってきました。そこで出会った現地の方々には日本語や日本の文化に関心を示してくれて、大変嬉しく思いました。今回の論文に書いた上海研修での経験とも重なり、お互いのことを知ろうとしたり、理解しようとする姿勢がいかに大切かということに改めて感じることができました。これからいろいろな人と出会うなかで、自分の中に生まれる新たな発見や考えを深めていけたらと思っています。



池上さんから直接、論文の感想をうかがえます



会長の藤沼と歓談する入賞者



「日本語で論文をまとめるのは大変だった?」



「論文の内容に共感しました」最相さんの言葉に感激!



論文への感想を聞く入賞者



入賞者同士、話が盛り上がります



## コンテストへの応募動機

# 思い描く社会の実現のために、 貢献できることを考えたい

大学生

留学生

コンテストのテーマと将来やりたいことが一致していたことと、自分で考えた**アイデアをアウトプット**する機会が欲しかったから。(大学3年)

わくわくという感情が人を明るくし、社会を明るくするという考え方に深く共感し、自分の考えでさらに**明るい未来を創造**することができるような気がしたから。(大学2年)

さまざまな課題が山積する現代日本において、わくわくするのは難しく感じられる。私はどんなことにわくわくできるか、「わくわく社会」とはどんな社会なのかを考え、提案することを通して、これから**自分は何を学び、何をすべきか**考えるきっかけにしようと思った。(大学2年)

暗いニュースが日々報道される中で、自分が**理想とする社会**はどうすれば実現するのかを考える契機になればと思って、参加を決意しました。(大学4年)

ゼミで「少子高齢化問題」、「女性の労働問題」等に取り組んでいます。**学んできた内容を何らかの形でアウトプット**してみたいと考えました。(大学3年)

経済の授業で福島の復興に関して討論を行ってきたなかで、自分も何か福島の**復興の役に立てないか**という思いが強まった。それを一つの形に残せたらと思い、今回の応募を決意した。(大学1年)

大学での**専門的な学びと、実際の社会で起こっている事柄を結び付けて**考える機会を探していたため。(修士2年)

思い描くわくわく社会を実現させるために、自分が貢献できることを考えることで、自分自身の将来について見つめ直すいい機会になると考えました。また、**今の大学生がどんなことを考えているのか**を発信したかったからです。(大学2年)

2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した瞬間、わくわくした。この高揚感の延長線上にこそ、わくわく社会が存在しているのではないかとひらめいた。このわくわく感を現実のものとしてとらえ、少しでも**わくわく社会の構築への一歩**を踏み出したいと思い、応募することにした。(修士1年)

一人で何かに挑戦したり、やり遂げることで、今後の学生生活や就職活動での**自信に繋がる**のではないかといい、応募した。(大学3年)

ふだん、「どうしたらより良い社会になるか」について考えていた私にとって、今年のテーマである「わくわく社会」は非常に興味深いものでした。そして、**自分の考えを誰かに伝えることができる、すごく良い機会**だと思いました。(大学4年、留学生・韓国)

日本に長年滞在しているため、たくさんの人に手伝ってもらったり、協力してもらったりしています。自分もみんなのため、日本のため、**自分なりの努力**をしなければならないと考えたのが、この論文を書く動機となりました。(専門職大学院1年、留学生・中国)

コンテストへの応募によって、**いろいろな人と交流する**チャンスを得て、もっと勉強するきっかけができると思ったから。(大学2年、留学生・中国)

世界で様々な問題や困難があり、各国の関係が崩れつつある。このコンテストを通じて、私たちは**助け合わなければならない**ことを多くの人に知らせたかったから。(日本語学校1年、留学生・シンガポール)



## コンテストへの応募動機

# テーマにひかれ、 自分なりの「わくわく社会」を考えたい

高校生

「わくわく社会」というテーマに興味を持ち、私が描く「わくわく社会」を**多くの人に知ってもらいたい**と思い、応募しました。(高校2年)

**被災地の人々の心をわくわく**させられるような社会はどのような社会か、興味を持ったため。(高校3年)

「わくわく社会」という**テーマの新鮮さにひかれた**ためです。自分が「わくわく」を感じるものが世界を変えることができるかもしれないという視点で物事を見直してみたいと思いました。(高校2年)

自己完結で終わりがちな**日々の考えを真剣にぶつける場所**が欲しかったから。(高校2年)

初めは単に学校の宿題だからと思っていましたが、このコンテストのメッセージを読み、きちんと**これからの日本について考えよう**と思ったからです。(高校1年)

学校の先生にコンテストを紹介され、自分は将来**どのような社会を作る一員になりたいのか**についてよく考えてみたいと思ったからです。(高校1年)

毎日暗いニュースばかりで、特に老人の孤独死や戦争、貧困で亡くなる子供たちを見ると胸が痛みます。もし**すべての人が楽しく幸せに暮らしたら**、そしてその前にそんな社会とはどういうものなのか、一度自分で考えてみたいと思いました。(高校2年)

「失われた20年」ともいわれる不景気の中で生まれ育った私の世代は、日々暗いニュースを耳にしながら生活してきました。**「わくわく社会」という言葉は私にとって憧れるもの**であり、また興味深く思ったからです。(高校2年)

このコンテストを通して、これから**自分たち若者が担っていく社会**について考えてみたくなったから。(高校1年)

コンテストのテーマである「新たな時代を切り開くために、人々のわくわく感が大きく、強くなる必要がある」という考え方に共感し、私なりのわくわく社会を実現する方法を考えたいと思ったから。また、**私のわくわく感を少しでも誰かと共有できれば**と思ったから。(高校2年)

「わくわく社会」というテーマが**今の世界に必要なこと**であると思い、自分なりのわくわくを知ってもらいたかったから。(高校3年)

授業で福島原発をテーマとした卒業論文を書いており、**福島から明るい未来を発信**していけると考えています。そのことを多くの人に知ってもらい、福島と未来について考えてもらいたいと思ったためです。(高校3年)

ホームページで過去の受賞作品を読んで同じ高校生が書いた小論文に感動し、私も**挑戦する意欲**が高まりました。(高校1年)

まだまだ未熟な私ですが、いずれ日本の**これからの社会を担っていく一人になりたい**と思っています。このような私でも「社会のために必ずできることがある」と、今の私自身を見つめ直し、この熱い決意を発表したいと思いました。(高校2年)



## NRI社員による審査の感想

# 学生の論文を読んで 社内審査委員が感じたこと

「課題・問題点を解決して終わり」という論文が多く、**その先のわくわく**が伝わってくるものが少なかった。(システムエンジニア/男性)

### もっと「わくわく感」を 大学生

「わくわく」というキーワードだったため、自分がわくわくできる論文という軸で審査した。**もっと夢のある論文**が読んでみたかったというのが正直な感想。(スタッフ/男性)

やはり日本と母国の両方の事情を知る留学生は、**考え方の視野が広い**ように感じた。ただし、なぜわくわくする社会が必要か、わくわくする社会とはどのようなものかというベースの考察が弱く、主張したいことに終始しがちになる部分もあり、そこが課題ではないかと思う。(システムエンジニア/男性)

### 留学生 グローバルな視点

留学生から日本を見る視点を感じることができ、グローバル化に興味を持っている自分への**良い刺激**となった。日本人よりも留学生の方が日本社会に対する危機意識を持っているのではないかと、逆に危機感を覚えた。(システムエンジニア/男性)

**日本語のレベルは全体的に高い**と思うが、わくわく社会とのつながりがはっきりしない、論理的でないものが目立った。(コンサルタント/男性)

自分にはない観点での主張もあり、**気付きと学び**の機会となった。(システムエンジニア/男性)

どの論文も手堅い口調で展開していたので、**もう少し元気よく書いてもよかった**のではないかと思います。(コンサルタント/男性)

全体的にわくわく感があまり感じられなかった。これから来るであろう**社会にあまり希望が持てない**のかもしれない、これは大人の責任かもしれない。若い人たちがわくわくできるような人生を自分たちも送っていないとためだなど反省した。(システムエンジニア/男性)

非母語での論文コンテストに応募するという**気概**と、それを実際に遂行した**実行力**が何より素晴らしい。(システムエンジニア/男性)

どれも読んでだけで**こちらがわくわく**してくる論文だった。皆さんから頂いたこのわくわく感を大切にしたいと思う。(マネージャー/男性)

### 前向きさ、新鮮さ 高校生

**近頃の高校生の考えていることに触れる**良い機会になった。採点するにあたり、「わくわくする社会」について自分なりに考えることもできた。(システムエンジニア/女性)

「わくわく」というテーマが出ているにもかかわらず、「ネガティブな点をなくす」、「マイナスをゼロにする」といった提案があることに驚いた。**もう少し突拍子もないような、面白い提案**があるとよい。(コンサルタント/男性)

身近なところで起こったことや経験したことをもとに、「わくわく社会」に関して**高校生の視点**からいろいろと考察していて、とても面白かった。(スタッフ/男性)

自身の経験をベースとして、そこから夢のある提案をしている論文を高く評価した。目先の実現性よりも、それを自らの手で**実現していこうとする強い熱意**を持った論文に期待する。(コンサルタント/男性)

前向きで明るい論調が多く、読んでいて**元気をもらった**。(マネージャー/男性)

「わくわく」から離れた問題感覚からスタートしている論文が多かった。現在の**高校生の現実認識力**が高いと評価できる一方、高校生も現代社会が抱える様々な問題から前向きに希望だけを見つめることができなくなっている現実も感じられた。(スタッフ/女性)



# NRI 社員のコンテスト告知活動 全国各地の学校を NRI 社内応援団が訪問

NRI 学生小論文コンテストの告知活動の柱のひとつは、有志の NRI グループ社員による「社内応援団」が担っています。ポスターやチラシを持って、母校や全国各地の学校を訪問し、生徒たちや先生たちにコンテストへの応募を呼びかけました。

## 宮城県仙台第三高等学校

**土門 和幸** (保険システム五部)

2011 年度に大賞受賞者が出た母校を訪問

昨年に引き続き、今年も母校を訪問してきました。今年から対外担当となった教頭の武田先生にお会いし、まず NRI について説明。「NRI 学生小論文コンテスト」への応募をお願いしたところ、「今年の夏休みの宿題の中から小論文コンテストの趣旨にあうものをピックアップして、応募したい」と心強い言葉をいただきました。



右が武田教頭先生、コンテストへの応募を快諾していただきました

## 宮城県 私立 宮崎日本大学高等学校

**若友 千穂**

(コンサルティング事業本部 グローバル事業企画室)

教室にて応募を呼びかけ

今年も母校を訪れ、教室で生徒たちにコンテストを紹介し、応募を呼びかけました。また、国語科の先生方にも応募をお願いしてきました。その際、教育実習に来た先生が過去のコンテストの受賞者だったという話をうかがい、先生たちと大変話が盛り上がりました。



生徒たちにコンテストへの応募を呼びかけ

## 広島県立安古市高等学校

**小室 一彦** (証券ソリューション推進一部)

今年も生徒たちに応募を呼びかけ

母校の2年生全員に、キャリア教育の授業の一環として、コンテストへの応募を呼びかけました。社内応援団として、今年が5回目の訪問です。先生方から「国内外ともに複雑な様相を呈しつつある現代社会において求められる力は何か、課題を投げかけてほしい」とうかがい、社会人生活や NRI の事業内容・書籍について対話形式で紹介しました。今回、母校から初めて入賞者が出たことをうれしく思います。



体育館で生徒たちにコンテストを説明

## 教員から見た「NRI 学生小論文コンテスト」

### 大阪府立千里高等学校

(今年の優秀賞受賞者の在籍校)

**榮 静香 教諭**

当校は国際文化科・総合科学科からなる専門高校ですが、独自の取り組みとして、「探究」という授業を設けています。これは、自らテーマ設定をして、探究し、論文にまとめて発表する力を培うものです。当校の生徒が学校での学びを生かして「NRI 学生小論文コンテスト」へ応募し、いろいろな方と知り合えたことは、大変貴重な経験になったと思います。



### 千葉県 私立 市川高等学校

(今年の優秀賞受賞者の在籍校)

**山田 一彰 教諭**

当校は中高一貫の6年間で、読む力・書く力の向上に努めています。今回は高校生の国語の夏休みの宿題として、「NRI 学生小論文コンテスト」のテーマを選びました。多くの小論文コンテストの中からこのコンテストを選んだのは、池上さんや最相さんをはじめ、審査委員の方が丁寧な審査をされているからです。来年のコンテストにも生徒に応募させたいと考えています。





おわりに

前回、2012年のコンテストでは

「自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会」というテーマで募集し、現在の社会が抱える課題を解決した社会を伝えたい、という趣旨の作品が多く寄せられました。

今回は、足もとの課題ではなく、もう少し先を見て、あるべき未来を構想してもらいたいという想いもあり、「あなたが考える“わくわく社会”を描いてください」というテーマを設定しました。

課題を解決するという論旨では書けないので難しかったと思います。

そんな今回のコンテストに、過去最多となる1,538名の学生の皆さんから、ご応募をいただきました。ありがとうございました。

また、過去最多の応募をいただけたのは、募集の告知にご協力くださった、多くの学校や先生方のおかげでもあります。この場を借りて、心より御礼申し上げます。

応募してくださった学生や、応募に至らずとも論文を書きかけた学生の中から、これを成長のきっかけとして、一步を踏み出す人がたくさん現れることを、私たちはわくわくしながら、楽しみにしています。

2014年2月

「NRI 学生小論文コンテスト2013」事務局

## メディアでの掲載

NRI 学生小論文コンテストは、毎年、さまざまなメディアに取り上げられています。その一部を、紹介いたします。



「新潟日報」  
2013年12月13日付夕刊



「中日新聞」2013年12月19日付朝刊



「教育家庭新聞」2014年2月3日発行 第2037号



「月刊留学生」2014年1月発行 通巻175号



「高校生新聞」2014年3月1日発行 第214号



**NRI 学生小論文コンテスト2013**

**世界に向けて未来を提案しよう!**

野村総合研究所 コーポレートコミュニケーション部 CSR推進室

発行：2014年3月

Copyright©2014 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.





株式会社 野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル  
Tel. 03-5533-2111

<http://www.nri.com/jp>